

日比谷公会堂御講話（後半）

処でもう一つ私が言いたい事は、キリスト教にある最後の審判ですね。御釈迦様の言う仏滅の世と、

——これは色々な教祖、開祖が言われてますけれど、この二大聖者の事だけに留めておきますけれども、これは最後の審判と言うのはどういうことかと言うと、ただ最後の審判だけでは何か神様がこう思う。地獄でなくこの現世に閻魔様が出て来て裁くんじやないかというように思うのですが、そうじゃない。これはちょっと、未信者の人には、分りにくいのですけど、霊界と言うものがあるのですね、

靈界……。この我々が物質をさわったり、見えたりするのはこれは物質界、現界……。それからその奥に靈界がある。その中間に空氣界がある。空氣界までは分っているけれど、

靈界は分らない。丁度さっきの野蠻時代から文化時代、文明時代とこういうような順序です。この三段階のうちのその物質界、空氣界、靈界……。この三段階なんです。処が世界の循環率――、循環率によって明暗ですね、暗くなったり明るくなったり。これが一昼夜の二十四時間にこれがあるのでなくて一年にも明暗がある。一年の明暗と言

うものは、仮に冬は暗いと言う事になると夏は明るい。こ
うなるですね。太陽の光線から言っても夏が一番強烈なの
です。冬は一番薄いのだからして、これも明暗になってい
る。これが又、十年にも明暗があり、百年にもある。

歴史上平和時代もあるし、又暗黒時代もあるのは、やは
りそう言った一つのリズムなのです。

それから今度は千年にも万年にもある。それで今迄はこ
の暗の時代であった。暗い時代だった。今度明るい時代に
なるのです。明の時代。そこでこのさつき文明時代、文明
の明の字を書く、明るいと言う字、化ではバケですから駄

目、そうすると明るい時代になると、そうすると、今までの暗い時代のものが整理される。そして私の方で言うところの世界と昼の世界、夜の文化と昼の文化——こう言ってます——

そうすると夜の文化でいらないものが沢山出来て来ます。昼間になると電灯やいろんな言うものがいなくなる、と言うように、夜の時代の此処でいなくなること
は滅びるという事です。

審判は夜昼を分けるのです。いらないものは先ずしまいか、或いは毀す、これから明るいものを段々造って行く

と、こう言う事です。そうすると、今の霊界が明るくなると、どういう事になるかと言うと、人間にですね、人間と言うものはやはり体と霊とその間に空気に相応すべき水分というものがある、これが人間の体に必要である。そういう三段階になっている内の人間の霊ですね。

魂と言っている。それが霊界に属している。霊界が明るくなると、その明るさに相応しない魂の人は、どうしてもその相応するようにその曇りを取られるのです。取られると言って何か故意にとる訳じゃなしに自然に浄化すべき、汚ないものが、綺麗に替えなければならない。そうす

ると魂の汚ない人は、霊界が明るくなるにつれて掃除をされる、それが苦しみです。で、病気の原理もそういう事に説いてあります。それによると病気と言う事がよく分るのです。

今迄は霊と言う事を知らなかった。さっき徳川さんの言われたように魂です、魂というものの働きというものは、大きなものです、大変なものです。私は、昨日一年ぶり位で来た人がある。処が一年ぶり位でなく一昨日その人の事をちょっと頭に浮かんで、今どうしているのだろうと思った処が、昨日来たので「ああ霊が先に来てるんだな」と

こう思った。と言うのはこっちで――、徳川さんが松並と言う人が、一生懸命に書いている、というのを思っているとその想念と言うものが向うに行くのです。その人の――。その人の体に入るのは。頭へ……。此処までくると、ふッと浮かぶのです。

逢おうと言って、来るようなものです。

要するに霊線と言ってその人に交通するのです。これはこの霊線の何ですね。譬えなんですけれど。恋愛問題になんか解釈すると非常に面白いんです。けど今恋愛問題の目的じゃないです。これは信仰に入ったらそう言う事も分つ

て来る。（中略）そういう事が分ると、大いにそういう悲劇や社会悪なんかなくなるが、それはそれだけにしておいて……。

今言ったような工合に霊です。霊の曇りを明るさに相応するようになる時に、病氣位で済めばいいけれども、そうでなくてもっと強く、とても病氣なんか堪えられないで、その人は死んでしまう。病氣と言うものは、少しずつ来るから病氣で、あれでいいのですがね。あれで一ぺんに来たら倒れてしまう。最後の審判と言うのはそれなのです。そこで段々段々この霊界が明るくなるにつれて、

そして一ぺんに、やられることになる、その為に命を失うことになる。それが大量になる。大量になつては可哀想だからと言うので、この事を知らせて助けなければならぬと言うのが、神様の御意志であるので、私は神様に、それを命ぜられた。そして、こうしてお知らせするわけなのです。そうしておいて、私はですね。つまり釈迦とか、キリストとか言う人が、天国は近づけり、とか、今にいい世の中が来ると言う予言をされた――予言をされたそれをですね、キリストはただ予言者で、私は実行者なのだ。それを実行すると、本当にその世界をして、

病貧争絶無の地上天国を造ると、言う事を神様から命ぜられたのです。

その代り私が作るのではないから、決して骨が折れる事はない。万事神様が御膳立しますから、ただその形に表われたものだけを、やればいいのです。これは、非常な楽なものです。しかし楽だと言っても、責任は重いのです。まあ、恐らく人類肇まって以来、私位大きな責任を負わされたものはないと私は思うのです。そうするとこれによって、偉い人達の予言があって来るのです。ですから私の言うのは、もしキリストや釈迦の言った予言が、実際実現性

がないとしたら、予言じゃなくて虚言だったのです。いわゆる虚言とは嘘吐きです。あんなに偉い人が嘘を吐くと言う筈がないのだから、いずれは誰かが、実現されるものが出なければならぬというような意味で、その担当者として私が選ばれたと、こいう訳なのです。私はこういう事を、こんな大きな事を言うって事は、実際つらいのです。あんまり大それた事でいいにくいのですから今迄言わなかったのです。併し段々今言う夜から昼間になる時代が迫って来ましたから、それに人を救うには早く、大勢の人に、

それを耳に入れなければいかんと言う訳で、今日初めて大勢の方の前で喋るのです。

さっきノアの洪水の事をちょっと鈴木さんが言われましたが、あれもまあよく似ているのです。ノアの兄弟というのがありますね、兄弟がやはり神憑りになって神様から知らされた。

『もうじき大洪水がある、人類の大半はそれに捲込まれてしまう、だから一人でも多く助けろ』と言うのでノアの兄弟は非常に奴鳴った。知らした処が中々信ずる人がなかった。それで信じた人はたった六人なのです。ですからノ

アの兄弟二人と合わせて八人です。八人だけは信じた訳です。そうしてどうすればよいかと言うと、箱舟を作れと言ううのです。

ノアの箱舟と言うのは、丁度銀杏の実の形をしたものです。というのはこう言うふうになるのです。だから洪水の時もこの上に、猛獣だとか、大蛇とか上って来る。

その危険を救うために考えた。箱舟を作ってそして待つていた処が、あれは、四十日雨が降ったと言う説と、百日雨が降ったと言う説がありますが、これはどっちみち幾日も続いて降ったのです。——そして段々段々その水嵩が増

して、そして洪水になったのです。そうすると箱舟に乗ったものだけが助かったけれど、あとの普通の舟に乗った人や、山の上に上った人は、

みんな、猛獣や、うわばみやそういうものが上って来て食殺した。そうして助かったのは、その八人だけが助かったのです。その子孫が今日の白人だと言うことになっていますが、これは大体間違っていないと思うのです。何故ならば、日本でも伊弉諾、伊弉冉尊ですね。この二柱の神様は、天の浮橋の上で、そうして剣をこの泡みたいなのをかきまわして——ころころとかき廻してそこに島や国が

生まれたと、こう言う事になっているのです。あれは洪水に違いないのです。神道の方で言うと、潮干の業と潮満の業と両方あると言うことになっていた。

潮干の業と言うのは、水を干やす訳ですから伊弉諾尊は潮干の業をなすのです。それをした為に島や国と言うのは、あれは洪水の水を捨てたのです。今迄水底にあったのが現われた——こういう事なのです。

それはノアの洪水の時だと思うのです。こう言うような工合で、今度は、キリストの黙示録や色々ありますが、ヨハネは水の洗礼をすると、キリストは火の洗礼をすると言

う事なのです。ヨハネの水の洗礼はもうノアの洪水ですんだのです。今度は火の洗礼となると、それはやはり大変な、大きな悪払いです。

火の洗礼に就いては、色々の又、意味があるのですが、大分時間が来ましたから、これだけにしておきます。

（日公 昭和二十六年五月二十二日）